

令和元年度  
第 3 回神戸市ひきこもり支援施策検討会

議事要旨

日 時 令和元年 12 月 6 日（金）  
午後 1 時 44 分～午後 3 時 35 分  
場 所 神戸市役所 1 号館 14 階 AV 会議室

## <総論>

- 「K O B Eひきこもり支援室」が、ひきこもり地域支援センターとしての業務を担っていることが誤解なく伝わるようにしてほしい。
- 不登校がひきこもりになるというデータはない。学校との連携は大事といいながら、不登校だからひきこもりになるのではないかとの予測で動くのはよくない。社会に出ていくときの挫折感とか、無能力感とか、無意味感でつまづく人たちが、20代後半ぐらいにじわじわと相談にくるが、過去に不登校だったという経験の人は意外と少ない印象だ。
- 市民全体の問題と考えると、認知症の事故救済制度で行った超過課税の400円引き上げのような仕組みを神戸市で考えてはどうか。

## <相談・支援>

- 認知行動療法でいえば、コミュニケーションが苦手な場合に、グループ活動でのソーシャルスキルトレーニングによって、少しあいさつができる、雑談ができるようになる、就労に向けた実習の場に臨むといった支援を段階的に目指すのがよい。  
精神疾患がきっかけで10年ぐらいひきこもって、やっと外に出ることができ、さらに、就職を目指したいという方も結構多い。  
高齢者のサービスで、ケアマネジャーが家を訪問したらひきこもって未治療の方を発見した場合に、これまでは対応できなかったが、今後は関係機関と連携し、窓口相談しながらつなげていく支援をしてほしい。  
10代の子供たちにピアサポーターが体験談を話してもらうなど、メンタルヘルスや精神疾患に関する知識を得て、相談できることを周知することが重要だ。  
ゲーム障害については、小・中学校から教えていくことも重要。
- 本人も、ご家族も「ひきこもり」という言葉は知っていても、自分たちにとって何が起きているのかわかっていないものだ。個々の相談者が多様な制度、サービスを使いこなすというのは難しいので、ケアマネジャーがついて、その背後に、たくさんの制度、サービス、支援者たちがつながっている仕組みを構築できるとよい。
- 社会全体をどう変えていくかは大事で、盛り込んでほしい。  
社会復帰のトレーニングは、（依存症回復プログラムの）クラフトでされているので、実施する側に技術を要する部分を居場所とするのもいいが、しようと思ったときにで

きるような体制があるといい。

学齢期で既にひきこもり状態に陥っている方への支援をどうするか、ひきこもりによって生じている不登校の子どもに対する生活・生きる力をつけるという内容の記載が不足している。

#### < 専門的支援（就労・医療） >

●就職の新卒の採用のときに一度つまずいても、その後も再チャレンジできることを行政から各企業に伝えていくといったような一般就労につなげる取り組みが重要。

●不登校とひきこもりの件でいうと、男性は社会に出てつまずきやすい。女性は学校の段階で不登校になって、そのままひきこもっている子が多いように感じる。資料1「神戸市のひきこもり支援体制について（案）」には、「企業団体」があるべき。

ルールを一度外れると再チャレンジできないことが社会の最大の問題と思うので、企業にも協力してもらい、協力した企業には、「人を大切にする企業」優良企業マークのようなインセンティブを渡すなど、企業を巻き込んでいければよい。人材不足でもあり、雇用確保につながるため効果的ではないか。

●ヘルパー2級の資格応募の案内のビラをひきこもりの方の自宅に入れて、資格取得につながった例もあるが、資格取得に伴って実習とか体験ができるなどの働きかけや事業をしてはどうか。

精神障害者の社会適応訓練事業をひきこもりの方に活用して体験をしてもらってはどうか。

コミュニケーションが苦手な方の講座をするなどご本人が入りやすいテーマで事業を行い、それをきっかけに外に出ることを狙いとしてはどうか。

保健所で昔なされていたグループ活動みたいな形での集まりの場をつくってはどうか。

●家族支援、本人支援の後に中間的、過渡的な居場所を経験して就労につける、学校に行ける仕組みが必要。また既存の制度で抜けている部分、制度と制度の狭間がある部分を確認して施策で埋めていくことも必要。

●中間的な居場所、就労の場として、取り組んでいる事例もあるが、システムチックではなく、だれがコーディネートをするかの仕組みまではできていない。超短時間雇用の対象を拡大し、企業が参画しやすい仕組みづくりを考えていくべきだ。

●精神疾患等で社会不安が強いケースで、不安の軽減に認知行動療法が有効なケースが

多々あるが認知行動療法より、まずは社会でその制度として整えていくということが有効と考えられている。病気がよくなってから地域にとかではなくて、まず動かしながら薬物療法もやっていくことが有効との考えがある。

- 認知症と同じ考え方をすれば、プランニングをマネジメントする人が必要。また中間的な居場所が必要になって、そこまで行けばグループ活動への参加を通じて他者との関わりも出てくる。6,600人とも推計されるひきこもりの方に対して誰がケアマネジャーをするのが課題。
  - ひきこもって出られない状態は、普通の精神状態ではないと思うし、家族も既に抑うつ気分があったり精神的なストレスもあるだろうし、両方をケアしないといけない。ケアマネジャーを通して医療につなぐことが必要だ。
  - 社会復帰やソーシャルスキルをどこでどのように身につけていくのか、描けていない。日本ではメンバーシップ型が多いが、欧米では「このジョブをすればいいですよ」というジョブ型が多く、その方が仕事をしやすい人もいる。改革すれば労働市場に参入できる余地が大いにある。働き方とか、社会が掲げているバリアフリー化を進めることが必要。
- 社会のその欠陥をどう変えていくか。警鐘を鳴らすひきこもりの方に応えるような社会になるにはどうしたらいいかという視点が必要。
- ただおおよそ1万人に対してロングスパンのかかわりが必要で、断続的に相談が来る、さらに関係機関やアクターが多く連携も難しい。また各機関が掲げているゴールが違うので共通のゴールをどの辺にすればよいか、設定しにくい。
- 2、3時間でも働いて対価を得られるのは貴重で、結果的にコミュニケーション能力が刺激される。その際マッチングが重要で、個々の関係機関が差配できるかどうかだ。また、個別にジョブコーチがついて支援し、お金を稼いでいくのは悪くないとなってくれば、次のステップへ一段階上がる。
  - 例えばBPSDで暴れて困ってしまっていて、焦って精神科を受診させようとするが、まずはデイサービスを利用させることによって、症状が止まるし、家族も楽になることがある。そのような中間的な居場所があって、オープンな形で「自由に、いつでもいいから」集える場所があれば理想だ。

認知症のオレンジチームみたいな形でつないでいくというのがいい。

- ひきこもりの方の就労支援をするときに喜ばれるのが、適職、マッチングだ。あとは履

履歴の書き方や、面接の練習や、ブランクが長い人に適職を見つけますよというのと、その就活のやり方を伝えますよというところとすごく喜ばれる。

人生設計も重要でライフプランをそもそも組めずに不安でいる方が多い。ファイナンシャルプランナーなどがうまく使えないか。

ピア同士がSNSでやりとりしている。生の声を聞くことはリサーチにもなるし、どういうサービスが必要かを探ることは必要だ。SNSなどのテクノロジーを使っていくことも必要。

#### <情報共有・連携>

- 他機関の持っている情報をどこまで活用できるか、個人情報保護の観点から検討した方がよい。
- 命にかかわるような非常時の場合、個人情報個人意思に関係なく使えるなどしておくべき。
- 生活困窮者自立支援法を使って本人から同意なしに事前にやりとりができて、本人からの情報開示請求に対してどこまで応えるかは、今後の課題になってくる。
- 家族支援と本人支援とは明確に分ける必要があり、家族から得た情報から本人支援に関わるときに、新たに本人から同意をとる点は、他の自治体でもしっかりされているが、神戸市でもとる方がよい。